

八女市南部地区県営圃場整備事業地内

埋蔵文化財調査概報 4

福岡県八女市大字柳瀬・酒井田所在遺跡の調査概報

八女市文化財調査報告書 第29集

1993

八女市教育委員会

序

八女市南部地区圃場整備事業に伴います埋蔵文化財の発掘調査は昭和60年度より毎年続けておりますが、毎年のように貴重な遺跡の発見が続いています。本年度も縄文時代集落の発見など引き続き貴重な遺跡が発見されました。

発掘調査にあたりまして福岡県筑後川水系農地開発事務所、地元町内会、八女南部第2土地改良区をはじめ関係各位の御協力をいただき心から感謝申し上げます。

平成5年3月31日

八女市教育委員会

教育長 坂 田 不二夫

例 言

1. 本書は八女市が国、県の補助を受けて実施している八女市南部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査の調査概要の報告書である。
2. 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり、昭和60年より毎年継続して実施している。
3. 出土遺物の整理は岩戸山歴史資料館で継続して行っている。
4. 遺構の実測は国土調査法第Ⅱ座標系を基準にして担当者を中心に行い、現場での写真は中川が撮影した。なお浄書は田島が行った。
5. 本書の編集は中川が担当した。

本 文 目 次

1. はじめに.....	1
2. 位置と環境.....	2
3. 調査の概要.....	3
(1) アモメ遺跡.....	3
(2) 国伏遺跡.....	16

1. は じ め に

平成4年度八女市南部地区県営圃場整備事業は八女南部第2地区改良区分として八女市大字柳瀬地区と酒井田地区を中心に約10haの事業が計画された。計画に先だって平成3年11月に該当地の試掘調査を実施し、事業地内の埋蔵文化財の把握を行った。その後事業計画が具体化したため、市、県教育委員会、土地改良区、筑後川水系農地開発事務所と協議を行い、事業地内で掘削や削平を受ける部分、約14,000㎡を対象に発掘調査を実施することにした。

発掘調査は平成4年7月1日より開始し、平成5年3月31日に終了した。

調査関係者は次のとおりである。

八女市教育委員会

教 育 長	坂 田 不二夫
教 育 部 長	松 延 繁 太 (平成5年2月まで)
社 会 教 育 課 長	山 口 龍 一
社会教育課長補佐 兼文化財係長	中 村 武 紀
文 化 財 係	赤 崎 敏 男, 大 塚 恵 治
嘱 託	中 川 寿 賀 子 (調査担当)

八女南部第2地区土地改良区

理 事 長	近 藤 義 竹
理事長職務代理者	松 崎 勝 美 (平成5年3月より)
事 務 局 長	片 岡 孝 行
事 務 局 員	秋 山 由 美



第1図 梅雨時のアモメ遺跡(1地点)〔北東より〕

二反田遺跡など弥生時代から古墳時代を中心とする三河地区の遺跡群が広がっている。

アモメ遺跡は、平成4年度に行った発掘調査の中心となる遺跡で、縄文時代から歴史時代にかけての遺構がみつかり、特に縄文時代については、集落が発見されている。

今回の調査で発見された遺構は、竪穴式住居跡が33軒、掘立柱建物跡が2棟、竪穴遺構が11基、土壇が40基以上、小児用甕棺が4基、溝が4条確認されており、自然流路も確認されている。以下、3地点を個別に述べて行きたいと思う。

〈1 地 点〉

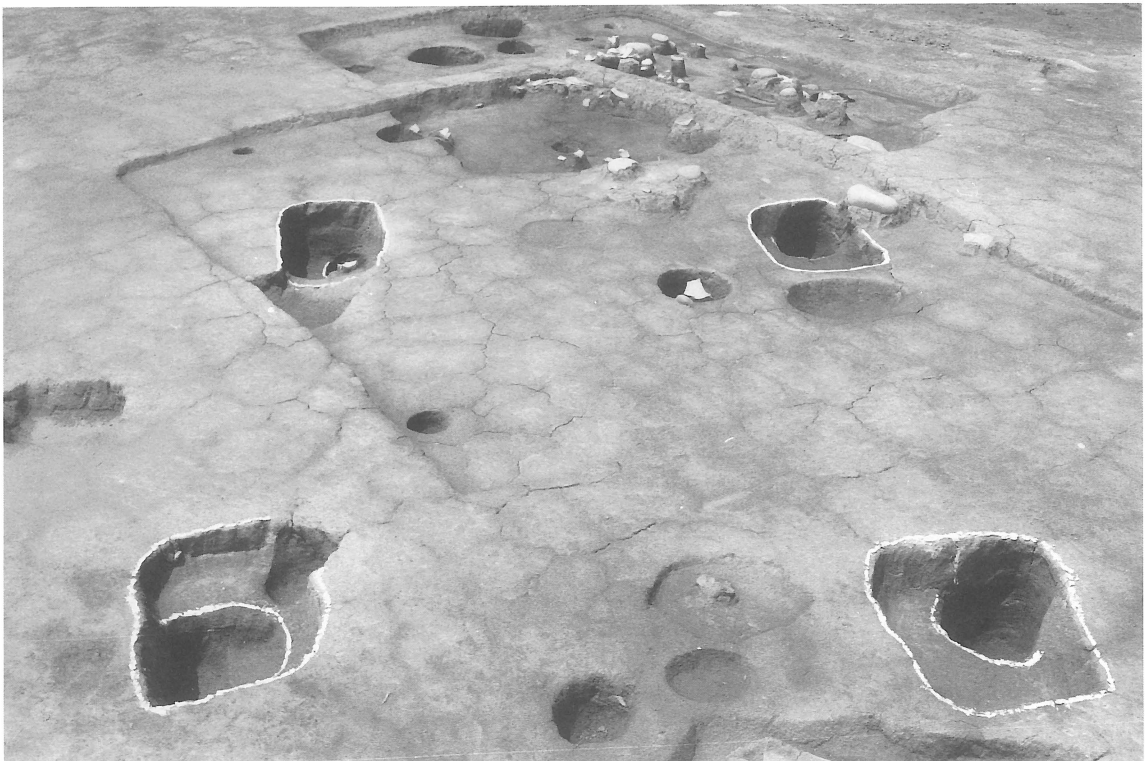
梅雨より調査を開始したため、調査は難行した。本調査区は、東南に長く、弥生時代中期の竪穴式住居跡3軒と、中期以降の掘立柱建物跡1棟、東南方向の弥生時代の溝が1条と、調査区のほぼ中央を、北から西へ湾曲して流れる自然流路がみつかった。また、土壇は東側に集中しており、8基確認されたが、そのうち2基からは、弥生時代の土器が多量に出土した。

（縄文時代の遺物）

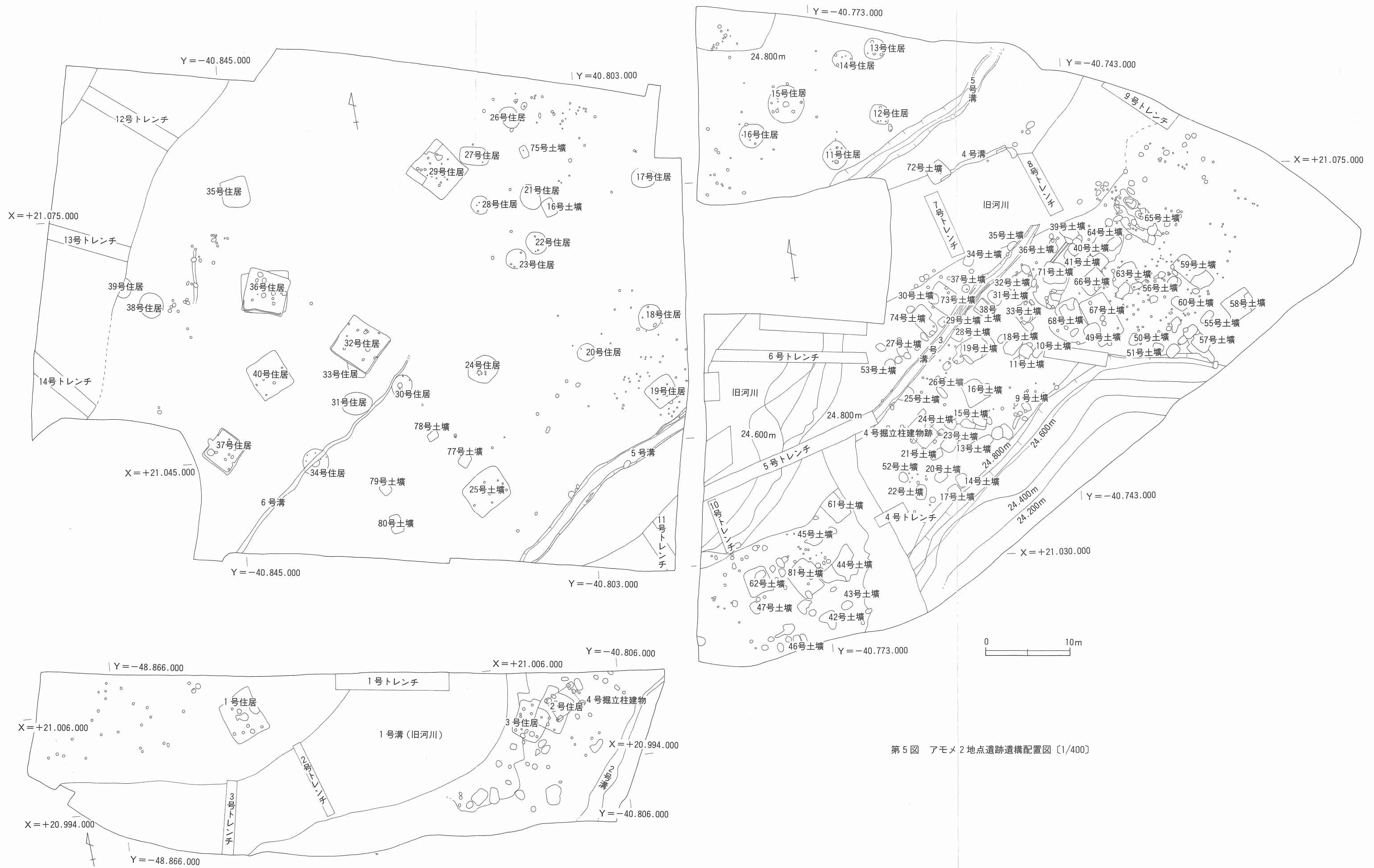
調査区東側を中心に、縄文時代中期と思われる深鉢の口縁部が採集された。その他、自然流路の東側沿岸部より、石錘や磨製石斧などが出土しているが、遺構は発見されておらず遺物のみである。

（弥生時代の遺構と遺物）

調査区西側より、弥生時代中期の竪穴式住居跡（1号住居）が1軒と、中央の自然流路を境に、東側より2号住居と3号住居が、切り合った状態で発見された。3号住居は、炉や柱穴が



第4図 掘立柱建物跡（4号住居）と竪穴式住居跡（手前が2号住居）



はっきりしないが、2号住居よりいくぶん新しいようである。また、4号掘立柱建物跡は、2号住居を壊してつくられており、4つの柱穴は、いずれも長方形で柱痕跡が確認された。規模は、1間×1間である。

また、調査区東端にあって東から南へ向かう2号溝からは、弥生時代の土器がみつまっているが、磨耗がはげしく、土器の出土が少量であるため、時期の細分化には至らなかった。そして、自然流路の左岸からは、多量の土器と、土器ほどではないが石製品が出土している。特に、弥生時代中期の甕の底部が多くみつかっており、南岸からは丹塗りの高杯が完全に近い状態でみつかった。その他にも丹塗りの甕の口縁部が出土しているので、祭祀が行われた可能性が高いと思われる。

その他の遺構としては、土壌が数基みつまっているほか、2号住居の北側から小児用甕棺墓が1基発見された。

遺物としては、1号住居から鉢形土器が、完全な出土しており、その他甕、高杯、器台などが出土している。また、石製品としては、1号溝の南岸から磨製石剣が出土しており、2号溝からは、多量の黒曜石の細片とともに黒曜石製の石鏃が数点出土している。その他砥石、磨石なども出土している。

（歴史時代の遺構と遺物）

1号溝の時期が不明だったので、3本のトレンチを設定して調査を行ったが、1地点のみでは、時期を決めかねた。しかし、2地点を調査することによって、歴史時代の自然流路も含まれていることがわかった。

遺物は、南岸より須恵器の琬などが出土している。

〈2 地 点〉

1地点より北西方向へ約10mの所に位置する。調査区は、東側を頂点に三角形の形をしている。東端付近から東側は、礫層になっており、南側は、削平されたためかいきなり落ち込んでおり、遺構がとぎれる。標高は、24m前後である。遺構としては、縄文時代の竪穴式住居跡が6軒と、弥生時代の掘立柱建物跡が1棟、同じく竪穴遺構が11基、同じく溝が2条、自然流路とその他土壌が40基以上。縄文時代と弥生時代の小児用甕棺墓が、それぞれ1基ずつ発見された。

（縄文時代の遺構と遺物）

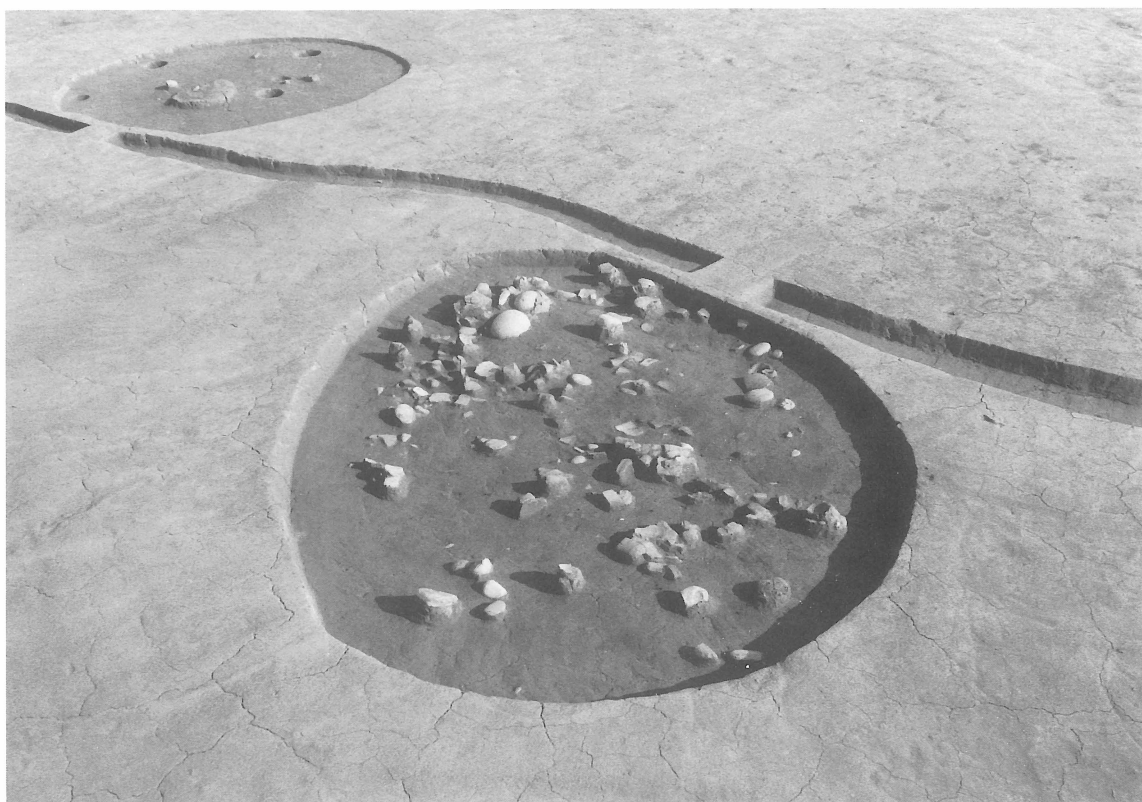
調査区北側を中心に、縄文時代後期の竪穴式住居跡が、6軒確認された。すべて円形で、規模としては、15号住居が4.5mで最大である。その他の住居は、すべて3m前後である。また、72号土壌は、自然流路の北岸にあってこれに切られており、南岸からは、小児用甕棺墓が1基発見された。

遺物としては、前述の小児用甕棺墓から獣形勾玉が出土しているほか、土器では、14号住居から三万田式土器の注口土器が、胴部から底部にかけて出土しており、その他浅鉢や深鉢の細片

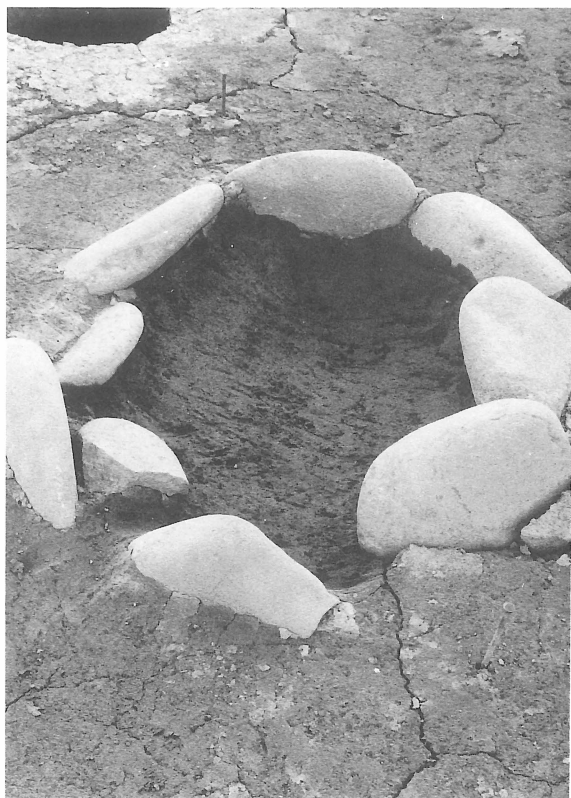




第7図 3地点より2地点をのぞむ〔西側より〕



第8図 縄文時代の竪穴式住居跡（手前30号住居）〔東側より〕



第9図 24号住居内石囲炉



第10図 甕棺墓 (K-3)

が、それぞれの住居跡から出土している。また、石器では、72号土壌から十字形石器が出土しており、14号住居からは、姫島産の黒曜石の細片が出土しているほか、16号住居からは、緑泥片岩製の石鏃が出土している。いずれも小型で、貧弱なものである。その他、住居跡の中から炭化した木の実類が出土している。

(弥生時代の遺構と遺物)

調査区南側は、全面にわたって弥生時代の遺構が広がっており、調査区西側の南北方向につづく自然流路（旧河川）を境として、東側には前期を中心とした土壌や竪穴遺構が集中してみつまっている。土壌の中で貯蔵穴と考えられるものは、34基をかぞえ、形としては、円形と方形の2種類があり、深いもので1.5m近くある。また、自然流路（旧河川）の東隣に5号掘立柱建物跡があり、規模は、2間×1間である。

調査区中央には、北東方向から南西方向にのびる弥生時代中期の3号溝があり、この溝と平行するように北側に、後期の5号溝がある。

それから、自然流路（1号溝）の上流部分が2地点でもみつかったことは、すでに述べた。この1号溝は、北東方向から蛇行して、西へのびており、1地点同様左岸には、多量の土器が含まれている。トレンチ調査の結果、1号溝は、2つ以上の時期の異なる川が流れた跡であることがわかった。

竪穴遺構の中には、33号土壌のように4つの柱穴を持つものもあり、71号土壌からは、中央部分に作業台として使ったと思われる平らな石が出土している。しかし、柱穴はみつからなかった。

また、調査区西側からは、丹塗りで合口の小児用甕棺墓がみつまっている。

遺物は、前述の71号土壙および、調査区西側の自然流路右岸より、碧玉製の管玉が出土している。また、71号土壙からは、彩文土器も出土している。貯蔵穴からは、前期の壺や甕が多く出土しており、自然流路（旧河川）からは、丹塗りの壺や甕がみつまっている。また、紡錘車も土壙などから6個出土している。

石製品では、磨製石斧や扁平片刃石斧、石のみの他に、石庖丁や石皿、凹石、石鏃などが出土している。

（歴史時代の遺構と遺物）

1 地点と同じである。

〈3 地 点〉

本調査区は、2地点の西側に隣接しており、南へ35m行ったところに1地点がある。標高は、2地点とほぼかわらない、遺構は縄文時代から古墳時代にかけての竪穴式住居跡が24軒、弥生時代の土壙が6基、弥生時代の溝が2条と自然流路が発見された。

（縄文時代の遺構と遺物）

竪穴式住居が16軒みつかった。規模は、24号住居が最大で、3.59mである他は、どれも3m前後で、2地点と同じである。その中で炉が確認されたのは、4基のみである。中でも、24号住居は、南よりに炉がつくられており、石囲炉であった。住居群は、中央の広場を囲むように広がっており、1部をのぞいて切り合い関係は少ない。

その他、23号住居の西側に小児用甕棺墓がみつまっている。住居にともなうものと思われる。

遺物としては、2地点とほぼ同じであるが、31号住居と38号住居から注口土器の注ぎ口部分が出土している。石製品では、打製石斧や石鏃、石皿や磨石、石錘などの他に、用途のわからない円盤形石器が10点近く出土している。また、18号住居からは、軽石が出土している。

（弥生時代の遺構と遺物）

調査区南側に、竪穴式住居跡が、2軒みつかった。2軒ともに弥生時代中期の住居跡であるため、1地点と2地点との関連が考えられる。規模は、19号住居が3.0m×2.5m、25号住居が4.0m×5.2mで、中央に炉を持っている。また、5号溝のつづきが、調査区東側に確認された。その他では、調査区中央に北東方向から南西方向にのびる6号溝があり、縄文時代の住居跡を切っている。

土壙は、3基みつかり、そのうち78号土壙から、焼けた投弾がかたまって出土した。25号住居内のピットからも、同じような投弾が出土しているため、この住居にともなう土壙と考えられる。

遺物としては、甕や器台が出土している。

（古墳時代の遺構と遺物）

竪穴式住居跡が6軒みつかり、規模はいずれも5m×5m前後である。そのうち3軒



第11図 貯 蔵 穴 (12号土壙)



第12図 貯 蔵 穴 (33号土壙)

は、炉を有しており、1軒は、西側にカマドを持っている。いずれも残りがよく、3軒に壁溝がみられた。また、柱穴はどれも50cm以上あり、下層に灰色の粘土がつまっていた。

また、36号住居の柱穴の底から、埴と手づくね土器の杯が出土しており、祭祀が行われたらしい。その他、35号住居は火災にあった住居のように炭化物が多く出土しているが、後で投げ込まれた可能性も考えられる。40号住居の床面からは、縄文時代の土器が出土しており、縄文時代の遺構を壊して住居をつくったものと思われる。

遺物としては、土師器の埴、高杯、甕などの他に、32号住居からは、土師器の有孔円盤が出土している。また、石製品は、砥石などが出土している。

(歴史時代の遺構と遺物)

調査区西側の端に北から南へのびる自然流路が見つかった。トレンチを3本入れて調査を行ったところ、2つ以上の川が合流しているのがわかった。遺物は少なく、須恵器の細片や、甕の口縁部のほかに、石製品では砥石が出土している。



第13図 アモメ遺跡2、3地点

第1表 アモメ遺跡1、2、3地点（住居跡）一覧表

アモメ1地点

種 別	住 居 名	規 模 (m)	そ の 他	時 期
竪穴式住居	1号住居	4.5×5.5	中央炉、主柱穴2	弥生中期
"	2号住居	3.5×4.5	中央炉、主柱穴2	"
"	3号住居	3.5×4.5	不 明	弥 生
掘立柱建物跡	4号住居	2.7×3.3	主柱穴4	弥生中期以降

アモメ2地点

種 別	住 居 名	規 模 (m)	そ の 他	時 期
竪穴式住居	11号住居	長径 3.40 短径 2.90		縄 文
"	12号住居	径 2.17		"
"	13号住居	径 2.45		"
"	14号住居	長径 2.23 短径 2.09		"
"	15号住居	径 4.30	主柱穴4	"
"	16号住居	径 2.98		"
掘立柱建物跡	5号住居	(2間×3間) 2.8×3.2	主柱穴6	弥生中期以降

アモメ3地点

種 別	住 居 名	規 模 (m)	そ の 他	時 期
竪穴式住居	17号住居	径 2.58		縄 文
"	18号住居	長径 3.04 短径 2.80		"
"	19号住居	3.0×3.5	炉	弥生中期
"	20号住居	径 2.21		縄 文
"	21号住居	短径 2.33 長径 3.10		"
"	22号住居	短径 2.33 長径 2.37	炉	"
"	23号住居	短径 2.22 長径 2.48		"
"	24号住居	径 3.59	石囲炉	"
"	25号住居	4.0×5.2	中央炉	弥生中期
"	26号住居	短径 2.20 長径 3.00		縄 文
"	27号住居	2.0×3.5 隅丸長方形		"
"	28号住居	径 2.16		"
"	29号住居	5.5×5.5	ベッド。	古 墳
"	30号住居	径 2.50		縄 文
"	31号住居	短径 2.78 長径 3.32		"
"	32号住居	5.5×5.5	住居内壁溝あり	古 墳
"	33号住居	不 明	32号住居にきられる	縄 文
"	34号住居	径 3.0	6号溝にきられる ほぼ中央に炉	"
"	35号住居	3.0×3.0	炭化物多し。	古 墳
"	36号住居	5.0×5.0	炉	"
"	37号住居	4.0×4.0	主柱穴4 西カマド。壁溝あり。	古墳後期
"	38号住居	径 3.0	中央炉	縄 文
"	39号住居	不 明	西側半分を自然流路 にきられる	"
"	40号住居	4.5×4.5	炉	古 墳



第14図 投弾出土状況（78号土壕）



第15図 弥生式土器出土状況（P-50）



第16図 古墳時代の住居跡（36号住居）



第17図 古墳時代の住居跡（37号住居）

(2) 国^{くに}伏^{ふせ}遺跡

- ① 所在地：福岡県八女市大字酒井田^{さかいだ}字国^{くに}伏^{ふせ}
- ② 調査期間：平成4年8月10日～平成4年10月2日
- ③ 調査面積：2,200㎡
- ④ 調査の概要

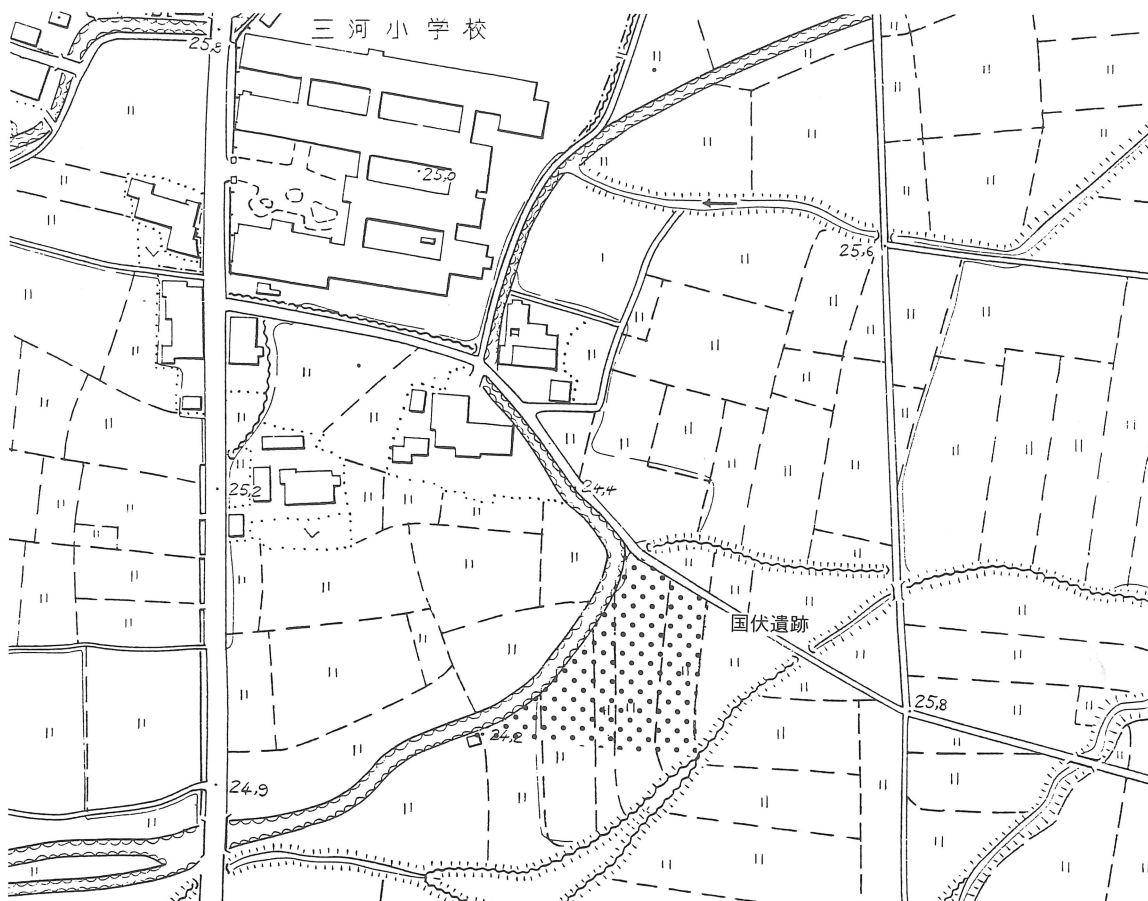
標高24m前後の南北に長い調査区域で、北東から南西にかけて、礫層がひろがっている。礫層の部分も含め、遺構と地山の判別がつきがたく、遺構の検出は、かなり難行したが、歴史時代の竪穴式住居跡が13軒と、同じく東西方向にのびる溝が1条、それに弥生時代の土壌が1基みつかった。以下、時期別に述べたいと思う。

(弥生時代の遺構と遺物)

弥生時代前期の土壌が1基みつかった。出土遺物は、亀の甲式土器の口縁部と、凝灰岩製の石庖丁で、アモメ遺跡2地点との関連が考えられる。

(歴史時代の遺構と遺物)

竪穴式住居跡が13軒みつかっており、9軒がカマドを有していた。規模は、いずれも4m×4m前後である。その他、東西方向にのびる1号溝は、幅が約2mあり、東側より^{ふいご}樋の羽口が出土



第18図 国伏遺跡調査位置図 (1/2,500)

している。1号溝の南側に、住居跡が何軒もあり、中でも7号住居の東側にある2号土壇は、表面がさびで赤変しており、中からスラグが出土しているので、遺跡内で鍛冶が行われていたのかもしれない。

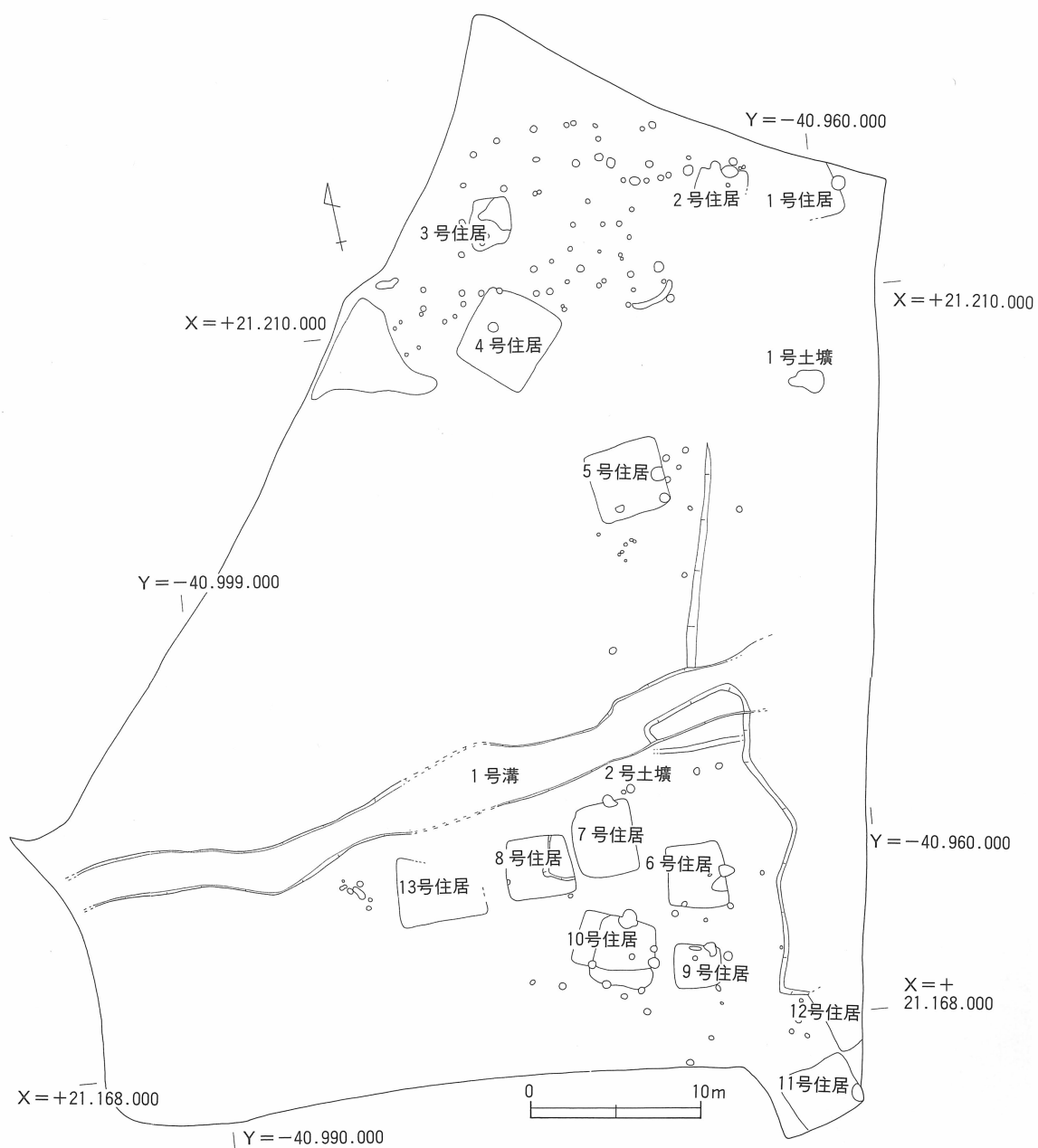
出土遺物は、須恵器の杯や蓋、長径壺の他に土師器の杯、甕など取手や紡錘車が出土している。

国伏遺跡

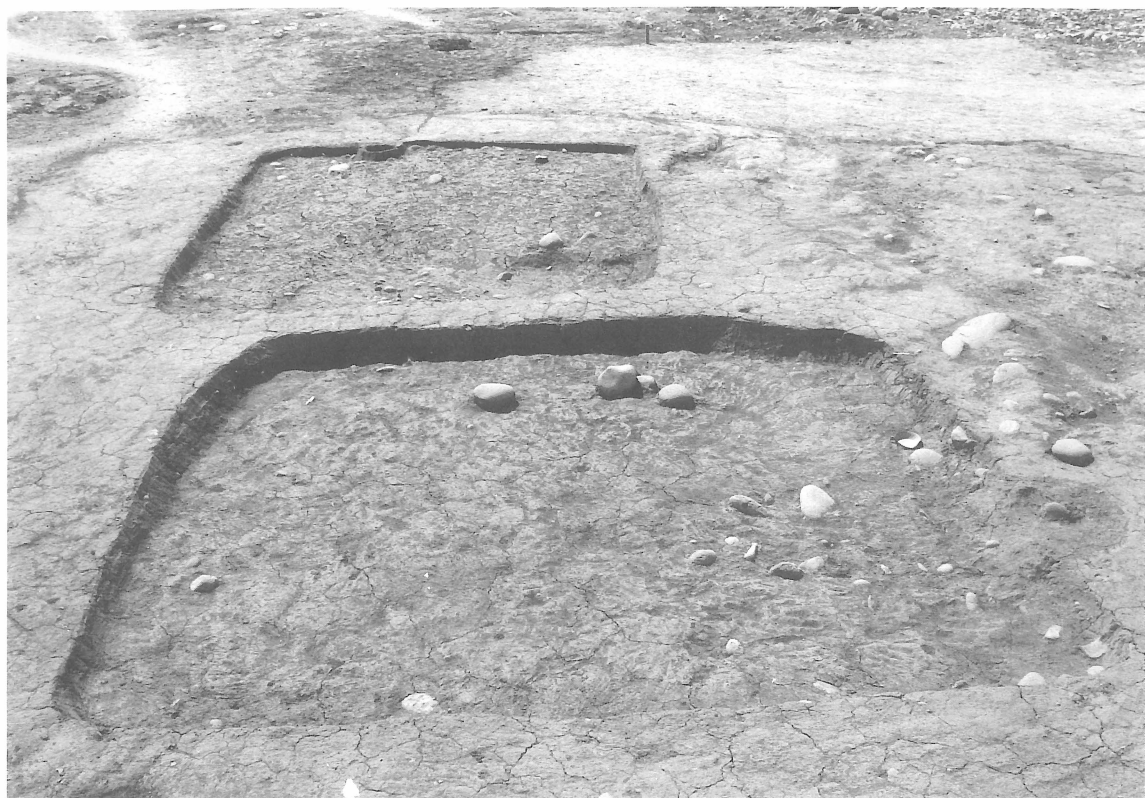
種 別	住 居 名	規 模 (m)	そ の 他	時 期
竪穴式住居	1号住居	不 明	北 東	歴史時代
"	2号住居	"	北	"
"	3号住居	2.4×3.0	な し	"
"	4号住居	4.8×5.0	"	不 明
"	5号住居	4.4×4.1	東	歴史時代
"	6号住居	3.2×3.9	"	"
"	7号住居	4.2×3.6	北	"
"	8号住居	3.7×3.6	な し	不 明
"	9号住居	2.5×2.7	北	歴史時代
"	10号住居	3.2×3.3	"	"
"	11号住居	4.1×不明	東	"
"	12号住居	不 明	不 明	"
"	13号住居	"	東	"



第19図 国伏遺跡全景〔南西より〕



第20図 国伏遺跡遺構配置図 [1/400]



第21図 国伏遺跡 7号住居（手前）、8号住居〔東より〕



第22図 住居跡（6号住居）

八女市南部地区県営圃場整備事業地内

埋蔵文化財調査概報 4

八女市文化財調査報告書 第29集

平成5年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647

印刷 アオヤギ株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31
電話 092 (641) 1431